

## F-69 Induction chemotherapy後の形成手術の意義

香川医科大学第二外科

○亀山耕太郎、前田昌純、岡本 卓、杉田礼典、岡田貴浩、桂 浩、小関萬里、中元賢武

【目的】DINC (dose intensive neoadjuvant chemotherapy) 施行後の化療前担癌気道に対する形成手術の意義を検討した。

【対象】DINC後、化療前担癌気道に対して形成手術を施行した16症例を対象とした。組織型は小細胞癌3例、大細胞癌1例、腺癌1例、扁平上皮癌11例(double primary 2例)、であった。臨床病期は小細胞癌I期1例、ⅢA期1例、ⅢB期1例、非小細胞癌double primary I期2例、ⅢA期5例、ⅢB期5例、pm IV期1例であった。術型は、SL術型8例、WL術型2例、SP術型4例、WP術型1例、SL+WS術型1例であった。

【結果】DINCの奏効率は87.5%(CR2例, PR12例, NC2例)であった。内視鏡的に気道病変消失(以下後退)を認めた症例は8例(50.0%)であった。同部位の術後病理組織診が陰性(以下消失)であった症例は6例(37.5%)であった。

術後吻合部合併症は1例(肉芽性狭窄)、吻合部再発はなかった。5年生存率は30.5%であった。

【考察】化療後の気道病変消失の画像的診断の程度は42.9%(14例中6例)、内視鏡的診断の程度は75.0%(8例中6例)と考えられる。画像的奏効、内視鏡的後退は、消失とは限らず化療前担癌気道を切除する必要があると考えられる。従ってinduction chemotherapy施行後の形成手術は意義のある術式といえる。

## F-70 気管支形成術後の手術関連死亡症例の検討

長崎大学医学部第一外科

○岡 忠之、山本 聡、新宮 浩、永安 武、赤嶺晋治、辻 博治、原 信介、田川 泰、綾部公懿

【目的】原発性肺癌切除例で気管支形成術施行後の手術関連死亡症例を検討したので報告する。

【対象と結果】1970～1995年に原発性肺癌に対して気管支形成術を行った150例中、手術に関連して死亡した13例(8.7%)を対象とした。死亡日は術後1～109日で年齢は55～76歳(平均67.2歳)であった。病理病期はI期1例、II期1例、ⅢA期5例、ⅢB期5例、IV期1例と進行例が多かった。気管支形成術式は管状切除12例、楔状切除1例であり、11例に合併切除(肺動脈6例、上大静脈3例、左房2例、胸壁2例、食道1例)が行われた。主な死亡原因として気管支吻合部に関連するものが5例(縫合不全3例、気管支肺動脈瘻2例)、非関連症例が8例(上部消化管出血2例、肺炎2例、気管支断端瘻1例、胸腔内出血1例、緊張性気胸1例、肺水腫1例)であった。死亡のリスク要因として①70歳以上の高齢(6例)、②拡大手術による手術侵襲(6例)、③気管支吻合部血流障害による縫合不全(4例)、④術前化学療法(2例)、⑤術中出血(1例)、⑥糖尿病合併(1例)などがあげられる。【結論】肺癌に対する気管支形成術の適応において高齢者、拡大合併切除術、気管支吻合部の血流障害が危惧される症例、糖尿病合併例などは術後に重篤な合併症の発生の危険性があり、術後管理にあたって細心の注意が必要である。